

# コメントライナー

第6224号

2017年6月14日(水)

## ◎「日中友好」に舵を切る安倍外交のサプライズ

拓殖大学海外事情研究所教授 名越 健郎

### ◆北方領土交渉は後退

安倍外交は首相官邸と国家安全保障局が司令塔となって華々しい首脳外交を展開してきたが、当面、少し立ち止まって外交戦略を再検討すべき時期に来ている。個人的親交を築いたトランプ米大統領は「ロシアゲート」疑惑の捜査をめぐる混乱が長期化する気配で、今後外交・安保政策がおろそかになりかねない。安倍首相とプーチン大統領の首脳会談は17回を数えたが、北方領土の帰属交渉はむしろ後退し、展望は開けない。北朝鮮の核・ミサイル問題も深刻化する一方だ。韓国新政権との関係改善の機運も開けない。

### ◆対中敵対外交を修正

こうした中で、中国外交トップの楊潔篪國務委員(副首相級)が5月末に来日した際、日本政府が来年、日中首脳相互訪問を実現させる案を示したと報じられた。安倍外交は海洋進出を続ける中国の包囲を前提に展開してきた感があるが、官邸は外交難局の中で中国との対話重視に舵を切りつつあるようだ。自民党の二階幹事長が中国の広域経済圏構想「一帯一路」サミットに出席したり、安倍首相が「一帯一路」に協力姿勢を示したことにもそれがうかがえる。1年のうちに日中首脳の公式相互訪問が実現すれば、史上初となる。中国外務省はこの提案に「中国が中日関係の発展を重視し、望む立場は一貫している」と前向きに受け止めた。確かに、中国と対決外交を続けても消耗するだけで、東南アジア諸国も同調しない。この時期の「日中友好外交」はサプライズ効果があり、外務省主導では到底できない政治判断だろう。

### ◆トランプ政権への不信も

その背景には、5月26日のG7(主要7カ国)首脳会議の際に開かれた日米首脳会談がやや不調に終わったことがありそうだ。両者の三度目の顔合わせとなった会談は、「北朝鮮問題での結束強化」「テロの脅威への対応」で成果があったと発表されたが、筆者の得ている情報では、トランプ大統領は席上、中国重視発言を行い、尖閣諸島の防衛義務にも触れなかったとされる。4月のフロリダ州での米中首脳会談後、トランプ大統領は習近平国家主席を「わたしの親友」と持ち上げるなど、中国重視発言を繰り返しており、信頼関係を築いたかにみえる。安倍首相は日本頭越しの米中接近を危惧したかもしれない。G7の討議もトランプ大統領に翻弄され、米欧間を取り持とうとした首相の試みも挫折。首相はトランプ氏への信頼感をやや失ったかもしれない。中国接近は苦肉の策ながら、日本がここで日中関係改善に踏み出せば、ロシアや韓国、北朝鮮に対する外交カードになり得る。安倍外交の微妙な軌道修正が始まった。(なごし・けんろう)

◆監修◆ 内外情勢調査会

◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111(代表)

この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003